

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23520037

研究課題名(和文) イギリス道徳感覚学説とヒューム道徳哲学の成立：自然から規範へ

研究課題名(英文) The British Moral Sense Theories and the Development of Hume's Moral Philosophy:
from Nature to Norm

研究代表者

矢嶋 直規 (YAJIMA, Naoki)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：10298309

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、イギリス近代哲学研究を大きな主題としてヒューム哲学成立史の解明に取り組んだ。まずヒューム道徳哲学を認識論と統合的に理解する仕方から再解釈することから出発し、ヒューム道徳哲学の学説史的背景として大陸およびイギリス合理論、そして道徳感覚学派とヒュームの理論の関係を内在的に検討した。合理論との関連では、スピノザおよびサムエル・クラークとヒュームの関係を解明し、また道徳感覚学説との関連では、これまで比較的論じられることの少なかったジョゼフ・バトラーの理論とヒュームの関係を解明した。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I studied the formation of David Hume's philosophy in the larger context of modern British philosophy. I started by presenting a consistent reading of his epistemology and moral theory. Then, I examined the relationship between continental rationalism and its possible adaptation in Hume's philosophical system. In particular, I argued an intimate connection, as well as difference, between Hume and Spinoza. Regarding the sentimentalist aspect of Hume's moral philosophy, I illuminated the hitherto rather neglected relation between Hume and Joseph Butler.

研究分野：デーヴィッド・ヒュームを中心とする近代イギリス哲学

キーワード：ヒューム 近代哲学 イギリス経験論 道徳感覚 認識論 道徳哲学 ジョゼフ・バトラー スピノザ

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題の発想は、研究代表者が行った科学研究「デーヴィッド・ヒュームに潜む目的論の研究:近代哲学の再構築に向けて」課題番号(18520028)によって得られたものである。当該研究ではヒュームの主張『人間本性(自然)論』に内在的な仕方で、認識論相互の関連及び、認識論と道徳論の関連を綿密に論じた。その過程において、ヒューム哲学がデカルト以降の大陸合理論およびそれを受けて成立したホッブズ、ロック以降のイギリス理性主義がヒューム道徳哲学の成立に重要な影響を及ぼしていることが明らかになった。そこで、ヒューム哲学成立史を自然哲学が道徳哲学へと発展した過程として捉えなおすことが課題となった。

(2) 哲学理論的観点に関しては、ヒューム哲学では「自然」概念が道徳の基礎づけに大きな意味を持つが、ヒュームの自然概念は独自のものであり、大陸合理論及びイギリス理性主義における自然概念とヒューム道徳論における自然概念と連続性のありかたとともに、それらの断絶の根拠を解明することがヒューム研究を進展させるうえでの新しい課題となった。

2. 研究の目的

(1) 本研究はデーヴィッド・ヒュームの道徳哲学成立史の解明を主な主題とし、イギリス経験論と大陸合理論の関係、およびイギリス哲学における理性主義と感性論の関係を解明しようとするものである。

(2) 自然と道徳との関係をめぐってヒュームに大きな影響を与えた近代哲学者とヒュームの関係を解明することを目的とした。とりわけスピノザの合理論は、ヒューム自身が自身の哲学を理解するために参照すべき理論と明示している。また自然概念を体系の中心としている点で共通性がみられることからヒューム哲学成立にとって特別な意味を持つ。本研究では、ヒュームと大陸合理論の関係の解明のために、ヒュームとスピノザの比較研究を行う。

(3) ヒュームの道徳理論は道徳感覚学説と称されるグループに属している。しかしヒュームの独自性は、イギリス道徳感覚学説の創始者であり、また代表的な理論化であるフランシス・ハチソンの理論とは大きく異なっている。本研究課題はヒュームがハチソンから強い影響を受けながらも、ハチソンの理論を批判する方向に進んだ内在的な理由の探究を目的とする。そのために重要な同時代の哲学者としてジョゼフ・バトラーの道徳論及び自然神学論に注目し、バトラーによるイギリス合理主義哲学への批判を検討することでヒュームへの影響を考察する。

(3) ヒュームとヒュームに先行する合理主義及び経験主義の理論との関係をとらえ直すことにより、ヒューム哲学の重要課題で自由と必然をめぐる理論を再解釈する。

3. 研究の方法

(1) ヒューム哲学に対する歴史的アプローチを採用し、ヒュームに影響を及ぼしたと思われる重要な哲学者の原典テキストを精緻に解読し、またそれらの読解に重要な示唆を与えらる二次文献をできる限り広く参照する。

(2) ヒューム研究をリードする国内、国外の優れた研究者を招聘し知識提供を得るとともに、セミナーや研究会を開催し示唆を得る。ヒューム研究は時代的にも主題的にも広範な領域にわたるため、隣接分野の専門家との研究交流につとめ、議論を深めまた新たな着想のヒントを得る。特に隣接分野として、スピノザ、ロック、パークリの研究者との研究交流を深めるだけでなく、歴史学、社会思想史、キリスト教神学の専門家との交流を持つ。

(3) 個別的な研究成果が得られた段階で国内国外の研究会において成果を発表し、またそれを論文としてまとめて公刊する。

4. 研究成果

(1) 本研究課題によって、これまで十分に論じられてこなかったヒュームと先行哲学者の関係についての論文及びヒューム哲学に内在する哲学的主題について国際誌に掲載された論文を含め主要なものとして七本を公刊することができた。またそのための母体ともなる学会発表として三回の海外での発表を含め十五回の発表を行うことができた。これによって本研究課題の成果を広く発信することができたと考えられる。

(2) 本研究課題では、ヒュームの主著における認識論と道徳論の一貫的解釈を、「一般的観点」という中心概念に即して提示する単著を刊行した。同書において私は、ヒュームの認識論が道徳論の基礎付けとしての意義を有していることを明確にした。

(3) 自由と必然をめぐる哲学史上の最大の主題に関して、従来ヒュームは因果的決定論と道徳行為の自由の両立主義者であると見なされてきたが、ヒュームの決定論は、自由の認識と一致する社会的立場からの蓋然性の理論であることを主張した。

(4) 大陸合理論との関連においては、スピノザの自然主義との関係に着目し、スピノザの感性的認識とヒュームの連合主義との類似点を指摘した。そしてスピノザからのヒュームへの影響が、スピノザの哲学とヒューム

の哲学の体系的対称性に認められることを主張した。この主題に関しては、二度の講演と二本の論文によって、合理主義と経験論の比較研究に関する問題提起を行った。

(5) ヒューム哲学がロックのイギリス理性主義の影響を受けながら理性主義を批判する立場に転じた背景として、従来シャフツベリとハチソンの影響が指摘されてきた。しかしヒュームの道徳感情論は道徳感情の実在性を根拠にするのではなく、むしろ感性の自然な形成に基づいている。これがヒュームの経験主義であり、この立場に重要な影響を与えたのはジョゼフ・バトラーによるサムエル・クラークの理性主義への批判であることを明らかにした。

(6) バトラーの主著を検討し、特に「人間本性」概念についての議論をヒュームの同概念と比較検討した。ヒュームがホッブズの利己主義を克服する契機をバトラーによるホッブズ批判に見出していること、また人間本性と道徳規範の連続性を習慣の概念に求める発想をバトラーから得ていたことを論証することができた。

(7) バトラーからヒュームへの影響は道徳論にとどまるのではなく、因果論を中心とする認識論にも及んでいることを、バトラーの宗教論を検討することによって明らかにすることができた。ヒューム哲学の中心概念である蓋然性がバトラーの理論に由来することを論証した。またこれまで世界的にも注目されていなかったバトラーとクラークの初期書簡集を検討することで、バトラーの実験的方法がクラークの自然宗教への批判に由来することを解明した。とりわけヒューム哲学の中心原理の一つをなす「思惟可能性原理」がバトラーのクラーク批判に由来することを論証することができた。これらの新学説を国内の講演会及び、国際会議で発表し、成果を学会誌に論文として公刊した。

(8) 当初予期していなかった新たな知見として、ヒュームの自然宗教論とバトラーの初期書簡集の関連を発見することができた。この発見に基づいてヒューム宗教論解釈上の最大の難問とされる問題についての新学説を提示し、それを国際会議で発表した。その論文はインパクトのある国際誌に掲載されることになった。この成果は今後のヒューム研究だけでなく、18世紀啓蒙思想における神学と哲学の関係に関しても新しい視点を提示する可能性がある。

(9) 全研究期間を通して、隣接分野の優れた専門家を招聘して毎年中小規模の研究会を開催することができた。これによって研究者間の連携が図られ、また若い世代の研究者たちに研究上の機会を提起することができ

た。

(10) 研究最終年度には所属研究機関での研究休暇制度を利用し、米国プリンストン神学大学院スコットランド哲学研究所において研究をおこなった。その研究によってヒュームのキリスト教神学の背景の理解が深まり、次の発展的研究課題を得ることができた。また世界各国から集う国際会議で括題することで、世界の研究者とのネットワークを築くことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

Naoki Yajima, 'Why Hume did not Become an Atheist: Butler's Influence on Hume's Dialogues', *Journal of Scottish Philosophy*, Volume 15, Issue 3, 2017 (in print). 査読あり。

<http://www.eupublishing.com/loi/jsp>

矢嶋直規, 「神即自然と人間に固有の自然：ヒュームのスピノザ主義」、『スピノザーナ(スピノザ協会)』15巻、2014-16、47-67。査読あり。

矢嶋直規, 「ヒューム哲学成立についての一考察：ヒュームとバトラー」、『哲学論集(上智大学哲学会)』46巻、2017、印刷中。査読あり。

矢嶋直規, 「バトラー道徳哲学における人間本性：バトラーとヒューム」、『人文科学研究：キリスト教と文化』47巻、2016、1-32。査読なし。

[file:///C:/Users/Dr.%20Naoki%20Yajima/Downloads/02%E7%9F%A2%E5%B6%8B%20\(8\).pdf](file:///C:/Users/Dr.%20Naoki%20Yajima/Downloads/02%E7%9F%A2%E5%B6%8B%20(8).pdf)

矢嶋直規, 「ヒューム、言語、動機、一般的観点(主題別討議報告)」、『倫理学年報』66巻、2014、74-76。査読なし。

矢嶋直規, 「ヒュームにおけるスピノザの諸主題」、『人文科学研究：キリスト教と文化』46号、2015、281-303。査読なし。

https://icu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4042&item_no=1&page_id=13&block_id=17

矢嶋直規, 「ヒュームにおける自由と必然」、『人文科学研究：キリスト教と文化』44号、2013、88-112。査読なし。

<file:///C:/Users/Dr.%20Naoki%20Yajima>

[/Downloads/02%E7%9F%A2%E5%B6%8B%20\(9\).pdf](#)

〔学会発表〕(計 15件)

Naoki Yajima, "Some Butlerian Influence on Hume's dialogues", 'David Hume's Dialogues: Symposium', Center for the Study of Scottish Philosophy, Princeton Theological Seminary, N.J. 2017, 5, 17.

Naoki Yajima, "Hume and Butler on Nature", Center for the Study of Scottish Philosophy, Conference 'Science in the Scottish Enlightenment', Princeton Theological Seminary, N.J., 2017, 3, 11.

Naoki Yajima, "Butler's Influence on Hume" Visiting Scholar's Seminar, Princeton Theological Seminary, N.J., 2016, 12, 8.

矢嶋直規、「J・バトラーとヒュームの必然性概念をめぐる一考察」、『京都ヘーゲル読書会』、2016年7月3日、京都教育文化センター。

矢嶋直規、「ヒューム道徳哲学の成立についての一考察：ヒュームとバトラー」、『上智大学哲学会第84回大会』、2016年6月19日、上智大学。

矢嶋直規、「バトラー宗教論とヒューム道徳哲学」、『第11回日本ピューリタニズム研究大会』、2016年6月18日、青山学院大学。

矢嶋直規、「ヒュームにおける調和」、『ライプニッツ研究会』、2015年11月4日、慶應義塾大学。

矢嶋直規、「ヒュームにおけるスピノザの諸主題」、『第11回一橋哲学フォーラム』、第二回スピノザコネクション、2015年1月31日、一橋大学。

矢嶋直規、「ヒュームにおける経験と自然：スピノザとの対話に向けて」、『スピノザ協会』、2014年6月7日、明治大学。

矢嶋直規、勢力尚雅、林誓雄、中村隆文、「主題別討議、ヒューム：言語、共感、一般的観点」、『日本倫理学会』、愛媛大学。

矢嶋直規、「合評会・ヒュームの一般的観点へのリプライ」、『ヒューム研究学会』24回、2013年9月5日、南山大学。

Naoki Yajima, 'Do British Idealists have to be an Idealist? From Humean

Point of view', *The Second Workshop of Utilitarianism and the Idea of Happiness*, 2013, 3, 16, Yokohama Landmark tower.

矢嶋直規、「ヒュームにおける自由と必然」、『京都ヘーゲル読書会』、2013年1月13日、京都文化会館。

矢嶋直規、「ヒュームの一般的観点」、『イギリス哲学会関東部会』、2012年7月7日、東京大学。

矢嶋直規、「ヒュームの自然概念」、『キリスト教と文化研究所』、2012年6月29日、国際基督教大学。

〔図書〕(計 1件)

矢嶋直規、『ヒュームの一般的観点：人間に固有の自然と道徳』、勁草書房、2012。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢嶋 直規 (YAJIMA, Naoki)
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号： 10298309

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

ゴードン・グレアム (Gordon Graham)
プリンストン神学大学院教授
ジョナサン・ハーン (Jonathan Hearn)
エディンバラ大学教授
デーヴィッド・ファーガソン (David Fergusson)
エディンバラ大学教授
大久保 正健 (OKUBO, Masatake)
杉野服飾大学元教授
有江 大介 (ARIE, Daisuke)
横浜国立大学名誉教授
坂本 達哉 (SAKAMOTO, Tatsuya)
慶應義塾大学教授
竹中 真也 (TAKENAKA, Shinya)
中央大学講師